

がそう。」  
(残りの画面を全部引く)



京都には優れた先生が多いと聞いて、蕃山は毎日探し歩きました。しかし、行いが悪かったり、研究が浅かったりしました。どうしよう、習いたいと思う先生には出会えませんでした。

蕃山「優れた先生を探すのが、こんなに難しいとは思わなかった。どうすればいいのだろう。」

蕃山は宿にもどって、考え込んでいた時です。近くの部屋から宿のお客と宿屋の主人らしい二人の話し声が聞こえてきました。

③ お客が話をしています。

お客「近江の榎(現在大津市和邇)の宿屋で、私は心の美しい馬方と出会いました。その馬方は、川原市(現在高島市安井川)から侍を馬に乗せ、七里(約三十km)離れた榎の宿屋まで送りました。その侍は、加賀の殿様の大切なお金を京都まで届けるために旅をしていた飛脚だったのです。ところが、飛脚は宿屋に着いて、それをなくしてしまったことに気づき、『二百両の大金がない』と、大騒ぎ。その上、『切腹か、打ち首になる』と、泣き出しましてな。」



宿の主「それはたいへんなことでしたな。ところで馬方とどういう関係があるのですか。」  
お客「それなんです。川

原市の家に帰った馬方が馬の汗を拭こうとして、鞍の下から大金の入った財布を見つけたのです。『お侍の忘れ物ではないか』と心配し、往復十四里(約六十km)も歩き、疲れた体で再び夜道を走って、榎まで届けてくれたのですよ。」

宿の主「何と、親切な馬方ですね。」

お客「飛脚は、『親切な馬方のおかげで命拾いをした。』と泣いて喜び、馬方にお礼金を渡そうとしたのですが、馬方は『お客様の忘れ物を届けただけです。お礼はいただけません。』と言って受け取りません。その馬方は、『私は近くの小川村の勉強会で、中江藤樹先生にいつもよい話を聞き、その教えを守って暮らしている。』と言っています。」

宿の主「そうでしたか。よいお話を聞かせてもらいました。」

蕃山「近江には、中江藤樹というお方がおられるのか。村人をそこまで教えらるる先生なら、学問や行いのりっぱな方にちがいない。この方こそ、私が探し求めていた先生だ。小川村へ行こう。」

④ 蕃山はすぐ支度をし、小川村を訪ねました。静かで落ち着いた村です。先生の家の前には、その先生の名前の通り、大きな藤の木が青々と茂っています。

蕃山「私は、熊沢蕃山と申します。藤樹先生はおられますか。先生の弟子にしていただきたくて、桐原からお訪ねしました。」



先生と出会った蕃山は、その澄んだ目の輝き、温かみのある言葉から、「この先生以外に、私の求める先生はいない。」と感じました。

蕃山「私が教えていただきたい先生は、中江先生の他にございません。どうか、弟子にしてください。」

先生「私は、あなたに教えるほどの学問も、徳もありません。どうぞお帰ってください。」

蕃山が熱心に頼んでも、これ以上聞いてもらえませんでした。蕃山は、仕方なく桐原へ帰りましたが、「私が求めている先生は、中江藤樹先生だったのだ。また、必ずお願いに行こう。」と考え、一人で学問に励みました。

⑤ 蕃山は、朝晩が冷え込むようになってきた十一月、再び、小川村にやってきました。

蕃山「私は、以前に入門をお願いに参りました熊沢という者です。どうか、



先生にお取り次ぎください。今回は入門をお許しくださるまで、ここに決心して参りました。」

先生母「まあ、桐原の熊沢さんですね。伝えましょう。」

お母さんは、藤樹先生に取り次ぎましたが、先生は蕃山に会おうともしません。

⑥ 蕃山は、門前を持ってきたごさを敷き、その上に正座をしました。正座をしながら、静かにただ一点を見つめていました。お日さまが傾きました。あたりは暗くなり、ひしひしと寒さが迫ってきました。冷たい土の上に座っている蕃山の姿を、先生のお母さんは心配そうに見ていました。



夜が更けてきました。先生のお母さんは、温かいお茶とおにぎりを持っていきま

先生母「さあ、これでもお上がりなさい。」

蕃山「かたじけない。ありがとうございます。こうして、二日目を迎えました。蕃